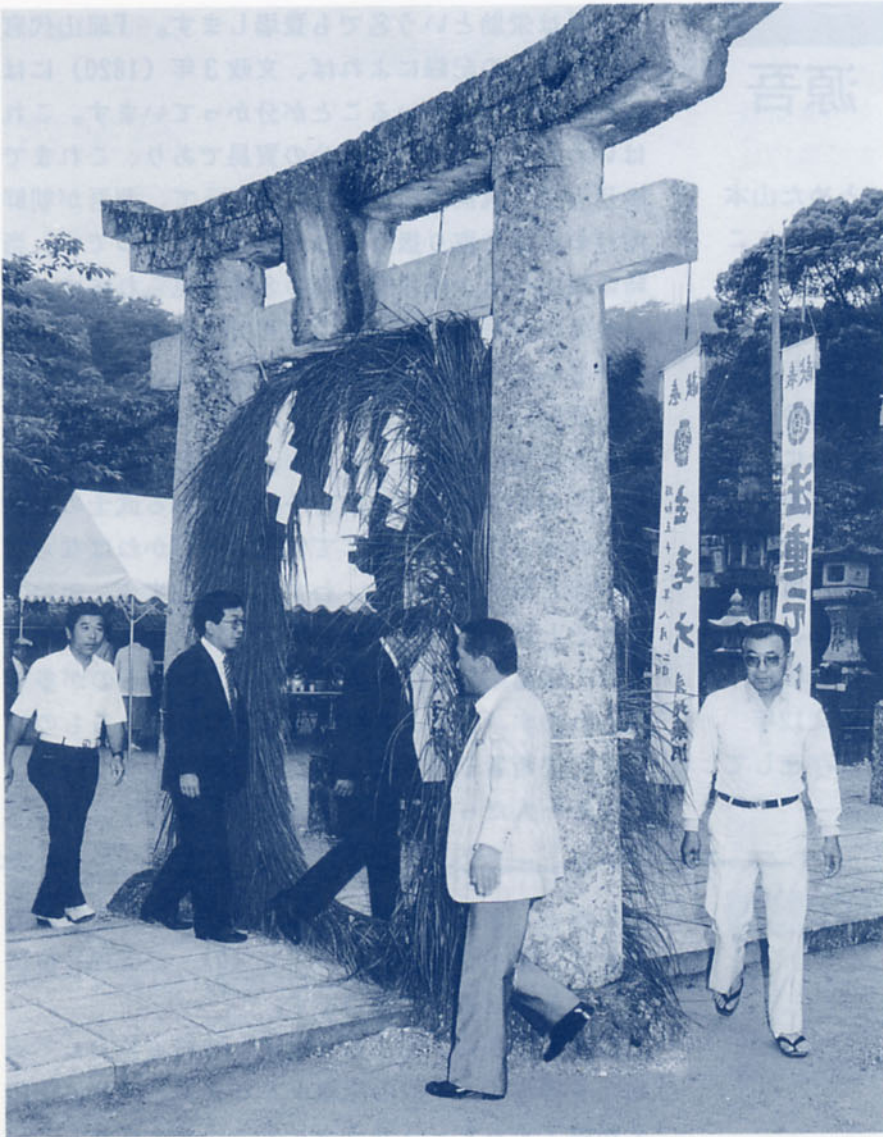


山のぼり

6月1日は山のぼりの日で、現在は八坂神社の厄払いとして定着しています。茅の輪くぐりやおはらいをして、仲間と呼ばれるグループで宴会や同窓会を催したり、旅行に出かけたりします。特に厄年の男の人は、念入りに山のぼりの行事を行います。

この行事のルーツは、江戸時代にさかのぼるといわれています。朝鮮半島から連行された帰化陶工の子孫たちが、稗古場の観音山に登り、祖国を懐かしみながら酒宴を催したことに由来します。厳しい労働と規制の中にあつた皿山の職人たちの数少ない楽しみの一つだったのでしょう。山のぼりの行事は、少しずつ形は変わりながらも、現在も昔と同じように休息の日として過ごされています。



稗古場・観音山の遠景

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No. 21

北島 源吾

寛永14年（1637）、初代皿山代官をつとめた山本神右衛門によって窯場の統廃合が行われました。これにより製陶地は有田の東側を中心とする13か所に限られ、そこでできた色絵素地は、赤絵付けだけを専門に行う赤絵屋に運ばれ、赤絵が施されました。

今回ご紹介する北島源吾もそうした赤絵屋の一人です。はじめ町内に11軒あった赤絵屋が、後に16軒に増やされ、それぞれの名前を確認することができます。赤絵町に9軒、本幸平に3軒、大樽、白川、稗古場、中ノ原にそれぞれ1軒ずつ赤絵屋がありました。源吾の住んでいた赤絵町という地名は、この付近に赤絵屋が多く存在したことからこの名称で呼ばれるようになったものと思われます。寛文12年（1672）には赤絵町という呼び名がすでに存在していたようです。

源吾は栄助という名でも登場します。『皿山代官旧記覚書』の記録によれば、文政3年（1820）には朝鮮貿易を行っていることが分かっています。これはいわゆる佐賀藩による公の貿易であり、これまでの伊万里・筑前の商人たちに代わって、源吾が朝鮮向けの製品を取り扱うことを許可したものです。当時の皿山代官、成松万兵衛の名前も見られます。

また、源吾は鍋島主水の被官でもあり、名字帯刀を許されていました。被官というのは、藩士と私的な主従関係を結び、普段はそれぞれの職業を営み、一般の百姓や町人よりも高い、武士としての家格を持つもののことです。被官を抱えている武士の側からすれば、家禄高に応じて常備しておかねばならない軍役としての従者を、わずかな扶持米や、無給で持つことができるメリットがありました。有田皿山では、鍋島家の家臣の被官となっているものも多く見られます。また、これら被官となっているものは有力な技術者であることが多く、源吾もそういう技術者の一人だったのでしょう。

田植え



昭和20年
ごろの児童
奉仕作業

有田町は山の谷間に細長く広がり、周辺の町に比べ、水田や畑の耕作面積が少ないのが特徴です。しかし、町の西側の地区では稲や麦なども生産されています。

5月ころになると、種籾を選んだり、田を耕したりと、米作りの一連の作業が開始されます。

機械が導入されるようになったのは、昭和30年代のことで、以前は、麦を刈り取った後の田んぼを、牛に犁を引かせ荒田おこしをしました。1回目は荒くおこし、肥料を加え、その後もっときめ細かく耕します。

種籾は塩水につけ、下に沈んだ実のつまった良い種子を選び出し、真水でよく洗い乾燥させ、メッキ（俵のこと）に入れて、川の水につけて発芽させます。苗床作りには、水を張って種子を蒔く「水蒔き」

の方法と、水を張らない「ぬりつけ」の2通りがあります。種子を蒔き、苗が7寸（21～22cm程）位に生長すると田植えを行います。

田植えは6月下旬ころに行い、地域で協力して田植えを行う「ユイ」の組織があります。無事に田植えが終了すると、「サラボイ」、「サナボリ」といって皆で集まり、神さんに御神酒をあげ、宴会を開き、労をねぎらいます。7月には神主さんをよんで、田がよくできるようにおはらいをしてもらう「田祈禱」を行います。

虫の駆除には廃油を利用しました。田に廃油をまき、笹を2～3本束ねて稲を払います。虫が払い落とされ、廃油の中に落ちて死ぬというわけです。また、蛾の駆除には「誘蛾燈」という仕掛けを作りました。ブリキの缶を作り、水を張って廃油をたらし油膜を作ります。缶に石油ランプを取り付け田んぼに置き、明りに集まってきた蛾がブリキの缶の中に落ちる仕掛けです。学校から帰った小学生の手伝いには稲に産みつけられたウンカの卵とりがありました。収穫までは虫の駆除や除草、肥料やりなどの作業のほかに、天候や成育状態を見ながら水の管理もしなければなりません。収穫後まで忙しい毎日が続きます。

この後の作業については、次号でご紹介します。

平成4年度の

小物成窯

古窯跡 発掘調査

平床窯

掛の谷窯

今回は平成4年度に発掘調査を行った小物成窯・平床窯（南川良山）・掛の谷窯（応法）の3か所の古窯跡について紹介します。

■小物成窯

有田で窯業が始まったのは、西部地区に分布する唐津系陶器窯と考えられています。具体的に確認されている窯場の名前を列挙すると天神森古窯跡群、小溝古窯跡群、清六ノ辻古窯跡群、山辺田古窯跡群、そして今回調査を行った小物成古窯跡群などです。窯業の揺籃期にはまだ産業としての基盤が脆弱で、窯業のみでは生活できなかつたのではないかと推測されています。そうしたことから、最初の窯業地として、比較的農地に恵まれた西部地区が選ばれたのでしょう。「半農半窯」といった状態だったのではないのでしょうか。

そして1610年代ころにはこの西部地区で陶器だけでなく、磁器の焼成が始まります。もちろん、現在考えられている天狗谷窯の操業年代より以前の事です。

小物成窯は有田のこうした窯業の揺籃期の状況を私たちに教えてくれています。その操業年代は1600～1620年代ころと推定されています。



小物成窯、平床窯を西部公園から見た遠景

■平床窯・掛の谷窯

有田では1650年代に新しい技術を導入して、技術革新を計ります。そのころの製品を見てみますとさまざまな造形、装飾上の工夫が見られます。例えば中国磁器なみに薄い器壁を持ち、高台の広い皿が作

れるようになったのもこの時期の事です。

平床窯・掛の谷窯はこの1650年代を操業期間に含む窯場です。しかし、この2つの古窯跡の出土遺物は内容が大きく異なります。

まず、平床窯については碗・鉢の占める割合が高く、染付製品以外に白磁（色絵素地）製品も多くみられます。胎土も白く、呉須の発色も良好です。また、皿などは高台の広いものがほとんどで明らかに1650年代以降の新技术を導入しています。しかし、素焼きを行っていないのか、大きく焼き歪んだものばかりです。この窯の操業年代は1650～1660年代と推定されますが、当時、東南アジアなど南方向けに大量に輸出された染付竜鳳荒磯文碗なども主力製品のひとつのようです。



掛の谷窯床面出土状況

次に、掛の谷窯の出土遺物はその大半が粗製の染付小皿です。特に日字鳳凰文皿が最も多量に出土しています。平床窯で多く出土していた染付竜鳳荒磯文碗は1点のみ出土しています。また、1650年代以降の新技术を導入したものが数点みられます。例えば高台を広く作るハリ支え技法、滑らかな白抜き線が描ける墨弾き技法を用いた染付皿などです。しかし、全体の中で占める割合はごくわずかです。この窯の操業年代は1650年ころと推定されます。

こうして、平床窯と掛の谷窯を比較してみますと、1650年代の技術革新も、全ての窯場で一律に行われたものでないことがわかります。1991年に調査を行った、楠木谷窯や外尾山窯の1650年代の様相とも異なります。楠木谷窯では、新技术を導入した集団と、導入していない集団が同じ窯で並存していましたし、外尾山窯では新技术を全体的に徐々に導入していった様子を読み取れます。1650年代は、まさに多様な年代と言えます。

発掘れぼうと

お知らせ

有田陶磁美術館の展示が変わりました。これまで2階展示室は陶片類の展示スペースが大部分を占めていましたが、幕末～明治期の有田焼の製品を中心に展示替えを行いました。これまでの資料に加え、近年、美術館で購入した新資料や寄託資料などを展示しています。散歩の途中に、ちょっとお立ち寄りになってはいかがでしょうか。



美術館2階内部

- ・開館時間 午前9時～午後4時30分
- ・休館日 毎週月曜日、祝日、年末年始
- ・入館料 大人 100円 大高生50円 中小生30円
- ・Phone 0955-42-3372

白川の細流

町じゅうが、賑わいを見せた陶器市も終り、静かな日が戻ってきました。新緑の最も美しい時期を迎え、植物といっしょに自分自身も大きく呼吸すると、とても健康になるような気がします。これがこの春私が気付いた、体の中から元気になる方法です。

初夏の雲がまもなく顔を出し始めるでしょう。無難にこの夏を乗り越えたいと願いながら、雨にしっかりとした緑を梅雨明けまで、もうしばらく楽しみたいと思います。

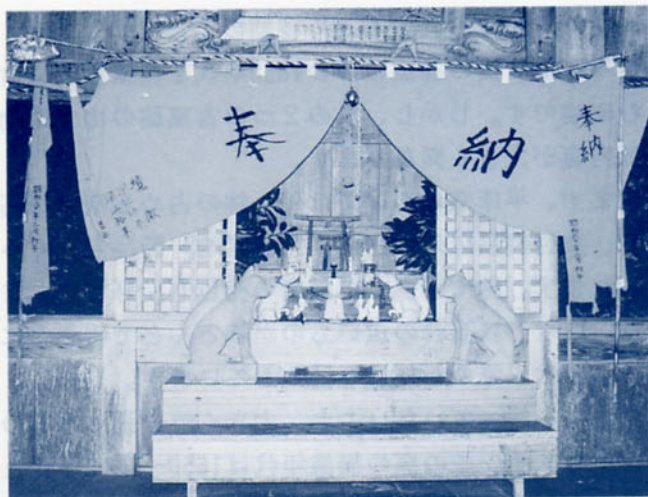
(萬)

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.21

発行年月日 * 平成5年6月1日
編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955-43-2678



白川稲荷社

稲荷

有田町は窯業を中心に発展してきた町です。町内各所に、窯に生活を委ねてきた人達ならではの信仰の一端を目にすることができます。

町の中に石造物が多いことも特徴の一つだと言えるでしょう。古地図を見ると、必ず窯の側には山の神や稲荷が、また川の側には水神が、というふうにあちこちにたくさんの祠が描かれています。その気持ちは現在にまで連綿と続いていて、本来の信仰の意味にプラスして焼き物に関係するさまざまな思いが込められています。

とりわけ、稲荷信仰は根強いものが見られ、その数も相当数に上ります。現在資料館では、幾種類かの石造物について所在の確認作業を行っていますが、弘法大師などとともに数が多いのがお稲荷さんです。石の祠だったり、社の中に陶磁器で作られた狐が祠ってあったり、お札が納めてあるだけだったりと形態もいろいろです。

稲荷は、五穀など食べ物や蚕桑のことを司る神で「稲生り(いねなり)」が「いなり」になり、神が稲を荷っているところから「稲荷」の文字を当てたものと言われています。しかし後に工業が興り、商業が盛んになると、農耕の神に商業神、屋敷神としての意味が加わり、拡大しました。

この辺りでは正月や初午の日には、商売繁昌、家内安全を願って鹿島市の祐徳稲荷神社に参詣する人が多いようです。また窯焼きさんなどは、毎月1日と15日に、屋敷内に祠っている神々に水や榊をあげるなど、各々の家に昔から伝わる方法でお祠りしています。

普段何気なく通り過ぎてしまうような場所にも、このように人の生活が表れています。

街角の歴史